

## 1. テキスト

「表現作用」「五」。第4～5段落。154頁14行目～157頁13行目まで。

## 2. テキスト解釈 (第4段落)

この段落では「意識統一」がどのようなものであるかが論じられる。従来の意識統一は「或一つの中心点」さらに「連続的な一つの創造作用」と考えられていた。すなわち意識統一は点ないし線としてイメージされていたが、それは「見られた影に過ぎない」とされる。創造作用が成立するには「創造作用の基体」となる「創造されもせない、又創造しもせない」スコトゥス・エリウゲナの第四の立場の如きものがなければならぬとされる。そうしてそれが「形なきもの」「影なき空間」「生じて生ぜず動いて動かざるもの」と呼ばれ、それによって「意識統一が成立する」とされる。すなわち意識統一は、点でもなく、線でもなく、「空間」だということである。意識統一に「空間」の語が充てられるのは、ここが初出であろう。「場所」概念の成立に近いことを思わせる。

西田はすでに、意識統一について「意識せられないもの、即ち意識としては無」(153, 9-10)であるが、それが「無にして有なる意識統一」(同13)と述べていたが、ここではこうした「意識統一の根柢」を重ねて「有に対立する無ではなく、有を含んだ無」と言う。ただしそれは「無限に現れるものを越えた」という意味で「無限なる潜在」として含んでいるということである。西田はこれをアウグスティヌスの「忘れるということも記憶の中にある」ということになぞらえて説明している。どこかで現れてしまうようなものではなく、どこまでも現れ続けながらどこまでも現れないものということであろう。忘れるということも記憶の内にあるということは、忘れたもの内にも記憶があり、その記憶の中にも忘れたものがある、ということになり、こうして無尽蔵の記憶があることになる。西田が「有形無形の万物を包蔵する記憶の偉大さ」というのはそういうことであろう。

この立場は「所謂自覚の立場」ではない。それは「一面に於て無方向であり、無自覚」である、プロティノスの「一者」であり、「人格を否定して然も之を自己の中に成立せしめる」「超人格的立場」である。ここにおいてカントの「目的の王国」も成立するとされる。「人格」は無限であるが、そうした「無限の人格を超越する立場に於てのみ無限の人格を内に映すことができる」のである。またこの立場はかつて西田が『自覚における直観と反省』において「絶対意志の立場」と呼んだものとされる。西田はかつて直観の立場から反省が成立することを自覚に基づいて明らかにしようとして、最終的に絶対意志の立場に立ったのであるが、直観から反省の成立を結局意志によって説明するという点で自らの立場を「神秘主義の軍門に下った」と評したのであった。

## (第5段落)

この段落ではこれまで述べられた「意識統一の根柢」がより積極的に「直観の立場」において成立するものであり、「真の神」であることが述べられる。

ここで西田はプラトンのイデア論によって「理想主義」の動かし難い基礎が置かれたとしつつも、なお「イデアがイデア自身を見る」といった「知るという作用」が明らかになるには、フィヒテの「事行」、すなわち「働くことが知ることであり、知ることが働くことである」という「自覚」の考えを待たなければならなかったとする。しかし西田はここで明確にこうした「自覚の立場」を超える。自覚を超越した立場において「人格的内容を対象化できる」とし、これが「真の直観の立場」であるとする。自覚を超えた立場において自覚が可能になるということである。

そうしてこの「直観」について「知るものと知られるものと一である」というような直観は「尚対象化せられた一に過ぎない」、「無限に生産的な基体なき作用」も「尚対象化せられた作用」とし、「百尺竿頭更に一步を進め」なければならない、とする。第4段落では意識の統一力を点や線のように考えるのは「見られた影に過ぎない」と批判されていたが、第5段落でも対象化された仕方での直観が批判されていると考えられる。「百尺竿頭一步を進む」とは彼

方への超越ではなく、此方への超越なのである。

次いで西田は「超越的な人格」すなわち従来の「神の自覚」を批判する。かかる神は「対象化せられた神」であり、「相対的たるを免れない」のみならず、こうした「神の考」では「各人の自由は失われ、悪の起源は説明せられない」とする。さらにヘーゲルの絶対精神を念頭に置いて「世界史に於て発展する神の自覚」も「恰も自然の根柢に於て考えられたる空しき時の如きもの」と批判する。「自然界」が単なる円形としての回転運動を行うとされていた（154）ように、絶対精神の内容がただ世界史において実現されるにすぎないような自覚においては、単なる繰り返しに過ぎない自然同様その内容は空虚だということであろう。ここでの趣旨は通俗的な有神論における神も、西田が理解する限りでのヘーゲルの絶対精神も、「対象化せられた神」であり、その「神の自覚」は「真の直観」ではない、ということであろう。

そうして「真の神」は「創造する神」ではなく「神秘学者の所謂神性 Gottheit の如きものでなければならぬ」とする。それは「主客合一の純なる作用」としての「働くもの」を「包む」「働かないもの」とであるとされる。

こうして西田は「意識統一の根柢」を「真の神」とし、それを「働くもの」を「包む」「働かざるもの」とするのであるが、それをさらにカントの「超越的对象」に比するものとしているのが目を引く。カントの「超越的主観」すなわち純粹統覚は「働くもの」であるが、「超越的对象」はこれを「包む」ものとされ、「すべて主観的意識に対し客観界とみられるものは、我々の意識作用を内に包み、之を成り立たしめるものでなければならぬ」としている。西田はカントの「超越的对象」を純粹統覚を包む「働かざるもの」と考えているのである。「働くもの」（純粹統覚）を「百尺竿頭更に一步を進めた」所が「超越的对象」である。

西田はこうした「意識統一の根柢」がプロティノスの「一者」に他ならないと述べて、最後に「始に云った如く、意識には意識自身の否定が含まれて居る、意識は自己自身の否定を内に含むことによって成立する」と述べる。「始に云った」とは第3段落で、意識において「無なるものが働く」という叙述を指しているであろう。自らの内に無を含むことによって、意識統一が意識統一になるのであるが、そこに成立するのが「すべてを内に含み、之を成り立たしめる」プロティノスの「一者」の如き、あるいはカントの「超越的对象」の如き、神性としての「真の神」である。